

「自分の家に帰りなさい」

2021 年 2 月 21 日（日） 仙台教会主日礼拝説教 マルコ 5：18～20

小林孝男

1. 癒された男

（1）悪霊に取りつかれた男

マルコ 5 章 1 節からの物語には、悪霊に取りつかれた男が登場します。突然訳の分からないことを大声で叫び出したり、自分でも自分を抑えきれず自らの体を傷つけたり、凶暴になり所かまわず物を壊したり、隣人にも理由なく暴力をふるったりしたのでしょう。村の人にとって彼は厄介者でした。力づくで大人しくさせようと試みても、彼の凶暴な力の前では、それはまったく効果がありませんでした。困り果てた村の人たちは、自分たちの平穏な生活を守るために、彼を共同体の外に追い出さざるを得なかったのでしょう。

共同体から締め出されるということがどういうことなのか、肌身に染みて実感したことがあります。30 年以上前のことですが、カトリックの方々が行っていた夜回りに、何回か参加させてもらったことがあります。ホームレスが仙台にも増え始めた時代です。

冬の寒い夜でした。前日に降った雪が 20cm くらい積もっていました。駅の構内や、ビルの踊り場、そして地下道など、ホームレスのたまり場を巡り、安否を尋ね、おにぎりやホットカイクをお配りする働きでした。仙台市内中心部にかまぼこ型のレジャーセンターという公共の建物がまだあった時代で、その建物の外周の軒下にも、ホームレスの方が何人かいました。段ボールを布団代わりに男性が寝ています。「体調はどうですか？」というこちらの呼びかけに、無言で弱々しくうなずくだけでした。その表情は、すべてを諦めている感じです。その方が寝ている 10 センチ横は、前日の雪で一面銀世界です。寒空の下、雪と隣り合わせで野宿する光景を目の当たりにして、社会からはじき出されるということは、こういうことなのだなあと、実際の寒さ以上のすさまじい寒さを、その時に感じました。

汚れた霊に取りつかれた男は村から追い出され、結局は、墓場の洞穴で雨露や寒さをしのぎ生きるしかなかったわけです。墓場は一般的には死や汚れの領域とされています。普通の人にとって、墓場はもちろん生活の場ではありません。人間が本来生きるべき所ではない場所で生きるしか術がなかったのです。この男がたまに正気を取り戻す時があったとしたら、自分が置かれている状況を思い、どれほど苦しみ、悲しみ、絶望したことでしょう。

（2）悪霊の喜び

そのような男がイエスと出会います。男はイエスに向かってこう叫びます。「**かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい**」。これは男の叫びというより、その男に取りついている汚れた霊の叫びです。汚れた霊にとって苦しみとは何でしょう？それはこの男が苦しまなくなることです。正常になることであり、人間性を回復することであり、普通の生活を取り戻すことです。これが汚れた霊にとっての苦しみなのです。人が苦しみ、幸せが破壊され、悲しみ、絶望することこそが、汚れた霊にとっては最高の喜びなのです。

レギオンと名のる汚れた霊の望みは、この所に留まり、圧倒的な力をもって人を苦しめ、平穏な生活を破壊し、災いをもたらすことです。人間性を奪い取り、人の人生を狂わせることです。それができなくなることは、汚れた霊にとっては苦しみに他ならないのです。

（３）悪霊の滅び

イエスは強大な力を持つ汚れた霊に対し、神の子の権威をもって、この男から出て行けと命じました。汚れた霊は何とかここに留まり、自分の仕事を果たしたいと思います。人々を不幸にしたいと思います。そこで、男から出る代わりに近くにいる 2000 匹ほどの豚の群れに移らせてほしいと懇願します。イエスはそれを許すのですが、霊が乗り移った豚の群れは、怒涛を組んで崖を駆け下り、湖になだれ込み、全滅してしまいます。汚れた霊もそこで滅びたのです。そのことによって男は、正常な姿を取り戻すことができました。

（４）人々の不安

この一連の出来事を目撃した豚飼いたちは、町や村に逃げ戻り事の次第を人々に伝えました。それを伝え聞いた人たちや、実際に成り行きを見ていた人たちの反応はどうだったでしょう？イエスに対して感謝や賞賛の言葉を述べるのではなく、意外にも「**ここから出て行ってほしい。**」というものでした。汚れた霊に取りつかれた男を共同体から追い出した理由と同じです。ここでもまた、自分たちの平穏な生活を乱されたくなかったのでしょう。得体のしれない不思議な力、レギオンをもしのぐ強力な力を持つイエスの存在は、良い悪いは別として、不気味であり、自分たちの平穏な生活をかき乱すのではないかと、不安を抱くに十分なものでした。一人の男が、イエスの御力によって正気を取り戻すことができた、一人の人間が、人間らしく生きることができるようになったことを共に喜ぶよりも、やはり自分たちの事柄が最優先なのです。自分たちの平和、自分たちの幸せ、自分たちの生活こそが一番大切なのです。何か私たち自身の姿をそこに見る思いがします。

（５）男の懇願

さて、今日の箇所です。イエスによって正気を取り戻した男の行動に注目しましょう。彼はイエスに、「**一緒に行きたい。**」、つまり弟子としてください、一緒に行動させてくださいと懇願しました。男は嬉しかったのです。絶望的な自分の人生がイエスによってまったく変えられ、人間らしく生きることを可能にさせていただいたからです。その喜びは大変大きなものでした。イエスに対する感謝の思いは、体中に溢れかえっていました。イエスに従いたい、弟子になりたい、イエスと一緒に行動するのなら何の不安もないと、心から思ったのです。当然でしょう。

さて、その男の懇願に対しイエスはこう答えます。「**自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい**」。救いの喜びに高揚する男の気持ちに、水をかけるような言葉です。冷たささえ感じてしまいます。しかし、私たちはこのイエスの言葉から、大切なメッセージを読み取る必要があります。

2. 自分の家に帰りなさい

（１）主に従うとは

大切なメッセージの一つ目は、「主に従う」ということを、紋切型に捉えることから自由になるということです。私たちは自分の家で、すなわち日々繰り返される何の変哲もない日常の中で、主に従うことができます。牧師になる決心をして神学校を目指すとか、牧師の連れ合いとなって共に教会の働きを担うとか、勿論それは立派な献身の姿であり、主に従う信仰的な証しとなるでしょう。しかし、そのような召しを受けるのは 1,000 人に一人いるのでしょうか。あるいは 10,000 人に一人いるのでしょうか。そのような召しを受けない大多数の人たちは、主に従うことができないのでしょうか？とんでもありません。自分の家に帰り、日常の中で主に従い、神の素晴

らしい愛の福音を、言葉をもって証しし、あるいは生き様を通し証しし、主に仕え、主に従うことができるのです。「**自分の家に帰りなさい。**」という言葉の中に、そのことを読み取りましょう。

(2) 安心して生きる

もう一つ大切なメッセージがあります。イエスによって救われたこの男は、これからもイエスと共にいることによって、レギオンのような敵、自分を苦しめ、不幸にし、人間性を奪うような力から守っていただき、喜びや平安に満ちた人生を歩むことを、心から願ったのでしょう。だからこそ、「一緒にいきたい」と願ったのです。イエスと共にいることが、何にもまして安心できるからです。

しかし、イエスは「**自分の家に帰りなさい。**」と告げます。先ほども言いましたが、随分と冷たい言葉のように感じてしまいます。しかし、決してそうではないのです。

私たちは次のことを確信しなければなりません。すなわち、この男がたとえ自分の家にいたとしても、主イエスは、そこに共にいてくださるのです。日常のごくありふれた状況の中にも、主イエスは確かに共にいてくださり、守ってくださるのです。導いてくださるのです。愛と恵みで満たしてくださるのです。

旧約の詩人はこう歌っています。

天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身を横たえようとも
見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも
あなたはそこにもいまし
御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

(詩編 139 : 8～10)

私たちがどこにいても、私たちを捉えてくださる主は、私たちの日常の中にも間違いなくいてくださるのです。

「**自分の家に帰りなさい。**」というイエスの言葉は、決して男を突き放す冷たい言葉ではありません。「あなたの日常の中に、私もいるから大丈夫だよ。あなたはあなたの場所で、安心して生きなさい。」と語るイエスの声を聞き取りましょう。

3. 置かれた場所で咲きなさい

(1) 置かれた場所で咲く

「おかれた場所で咲きなさい」という言葉をお聞きになったことがあるかもしれません。85年前(1936年)の2月、226事件が起こりました。陸軍の青年将校らが政府要人4名を暗殺し、天皇中心の新たな政治体制を作ろうとクーデターを起こした事件です。

暗殺された一人に、渡辺錠太郎陸軍教育総監がいました。彼は自宅で暗殺されましたが、9歳になる次女・和子は物陰から父の最期を目撃することになります。どれほどショックであったことでしょう。

彼女は18歳でカトリックの洗礼を受け、29歳のときノートルダム修道女会に入り、アメリカで学び、その後、36歳の若さで岡山のノートルダム清心女子大学の学長に任命されます。経験も実績もなく、またその若さで学長の重責を担わなければならなかった和子は、勿論動揺し不安に

心乱れました。そんな和子に対し、一人の宣教師が短い詩を手渡してくれました。「神が植えたところで咲きなさい」という英文の詩でした。

「神が植えたところで咲きなさい。咲くということは、仕方がないと諦めるのではなく、笑顔で生き、周囲の人々も幸せにすることなのです。置かれたところこそが、今のあなたの居場所なのです。」

この詩に和子はたいへん励まされ、63才まで学長を務め、その後89才で亡くなるまで同学園の理事長を務めました。学長時代にうつ病を患ったことのある和子は、素直にこんな風にも語っています。「置かれた場所で咲きなさいと言われても、咲けない日もあるのです。その時は、根を下へ下へと降ろしましょう。」

(2) 自分の家に帰りなさい

今日、イエス様は私たちに「**自分の家に帰りなさい。**」と語られます。今週もそれぞれの居場所に帰り、置かれた場所で咲きましょう。主の証し人として、なすべきことを行っていきましょう。イエス様は私たちがどこにいても、その場に共にいてくださいます。私たちの歩みを支えてくださり、守ってくださり、導いてくださいます。その様な主を証ししていきましょう。

しかし、長い人生いろいろなことが起こります。主の証し人として歩む力を持てない、そんな気持ちになれない、という時も当然あるでしょう。そんな時は無理をしないでいいのです。外に向かって花を咲かせるのではなく、ただただ安心して、静かに、内なる根を主に向かって深く下ろせばいいのです。そのような時も、あなたの一番深いところに、主イエスは共にいてくださり、あなたをしっかりと支え続けてくださるからです。

(祈祷)

神様、礼拝のひとときを感謝します。「自分の家に帰りなさい。」との御言葉を示されました。有難うございます。それぞれが置かれている場所で、あなたの愛を精一杯証しする者として咲くことが出来まよう導いてください。

病の床にある友をお守りください。悩みや不安の中にある友をお慰めください。苦しみの中にある友をお支えくださいますように。

あなたの愛と慈しみに信頼し、今週の歩みを御手にお委ねします。御心を行ってください。

どんな時も私たちと共にいてくださる主イエスの御名によってお祈りいたします。アーメン